

●——4時間目の授業（日本史 ※選択制）

4時間目の授業は日本史、世界史、地理からの選択制。選択した科目によって、生徒たちはそれぞれの教室へ移動しなければならない。

日本史を選択していた上田が、教室へと移動する準備を始めていると、後方から陽気な独り言が聞こえてきた。

「さして、次は、歴史、歴史♪」

もちろん、マリは日本史を選択していた。

「お前、1年の時から歴史の授業になるとご機嫌になるんだな」

浮かれ気分のマリを上田は茶化した。

「べ、別にいいでしょ……。得意科目が体育だけの上田くんに言われたくないわよお」

「体育が好きです。でも保健体育は、もうと大好きです！」

「サイテー」

上田がニヤリといやらしい笑いを付け加えると、マリは頬をふくらませ、軽蔑の眼差しで睨んだ。

「やあ、遠山さん」

そこへ、突如好青年が現れた。マリに声をかけた生徒の名前は【竹中ミキオ 2年C組クラス 副委員長 オカルト研究会】。

スラリとした容姿で顔立ちも端正なイケメン高校生。しかしその実、部屋に引きこもって考え事をするのが好きな不思議系でもある。

彼は世界史を専攻しているため、その教室となるA組へ来たのだ。

「あ、ごめんね。今、席空けるから」

マリと竹中は1年生の時にクラスが同じだった。竹中は学校きつての秀才で、全教科において常に1位の成績を収めていた。ただ選択科目が分かれる前の1年の時に、歴史の試験で一度だけ2位を取ったことがあった。その時、1位だったのが、マリだったのである。

「慌てなくてもいいよ……」

穏やかな口調でマリに語りかける竹中。

「あっ」

マリが急いで竹中に席を譲ろうとした拍子に筆箱が床に落ちた。それをすかさず竹中が拾い上げる。

そこへ「ミッキー、お待たせ！」と【木下フジコ 2年C組 テニス部・オカルト研所会】が元気よく教室に駆け込んで来た。

「昨日の特番、本当は怖い裏の世界史、超おもしろかったよね！」

最近、竹中と付き合い始めたというフジコ。お世辞にも美人とか、可愛いとか、スタイルが良いとかは言えないが、話術や人の心を掴むのがうまく、クラス、部活の人気者なのは間違いない。あった。

それでも、これだけ外見が不釣り合いなふたりが付き合っていることは、この学校の七不思議に数えられていると言ってもいい。

「ああ、僕が言ってた通りだったろ？」

「うん、うん、さっすがミッキー」と必要以上に相槌を打つフジコ。

「でも、『連中』の恐ろしさはあんまんじゃない。もっとおぞましい計画を用意しているはずだよ。最近、ケータイの電波状況が悪いのをマスコミは、地球がフォトンベルトに接近したためだとしているけど、それも僕は怪しいと考えている……。おまけに地球がフォトンベルトに突入した際には、人類は遺伝子レベルで変化するつても、連中が関わっているような気がするな……。毎年、海外のメジャー局がエイプリルフルにとんでもニュースを流すよね？」

「火星人がアリゾナの砂漠に出現した——とかってヤツう？」

「ああ、あれは言わば予行演習だよ。ヤツらが流す情報操作のね」

「そうなの……。何だか私、怖い」

「ごめんよ木下さん。恐がらせてしまったようだね」

「あの……」

付き合ひ始めた男女が、嬉々として会話を始めた傍らで、完全に部外者扱いのマリ。竹中とフジユの会話には、マリと言えどもついていけそうになかった。

「あの……筆箱」

「ああ、ごめんよ」

竹中は思い出したかのようにマリの方へ向き直り、手にした筆箱を渡した。そしてその透けるような瞳で、マリを観察するように見つめた。まるで何か同族的な者を見るようなまなざし……。…。

「あ、ありがとう」

マリはその視線から逃れるようにして、おずおずと筆箱を受け取った。

「何やってんだよ！ 早く行けど、コラ！」

マリと竹中が作り出す不思議オーラの中へ、突如、上田が土足で踏み込むように割って入った。

「えっ？ うん」

上田に連れられて教室を出るマリの背中を、竹中は見送った。

教室から出た上田とマリはB組の教室へ向かった。正面からC組の明智が歩いて来るのが見えた。そう、彼も日本史の授業を選択していた。

やはり移動のため、B組の教室から出て来た女子生徒ふたりが、明智の姿を認めるとにこやかに手を振り、ふたりはお互いの顔を見わせて「キャ」とはしゃいだ。

「チツ」

明智が鬱陶しそうに顔をそむけた瞬間、マリと視線が合った。マリは慌ててその視線をそらした。上田と仲良くしている姿を見られて誤解されたくない、内心想ったからだ。

「の野郎……」

そう上田が小さくつぶやいたことにマリは気づかなかった。

明智が続いてマリと上田が教室に入ると、そこには先ほど、見事な競演を見せてくれたB組のサトミとC組のシズカがすでに着席していた。

マリに気づいたサトミが、ペコちゃんばりの口角をキュッと上げた笑顔で手を振る。マリもそれに応えるように、ぎこちなくサトミの笑顔を真似て手を振り返した。

そんなふたりのやりとりの最中、石田が教室に入って来た。

「か、可愛い」

彼の瞳には、手を振るサトミの姿だけが映っていた。

まもなく、先生が教室に入ってきて授業が始まった。

「えーと、今日は幕末だったかな？」

日本史の担当は【林義利 2年B組担任 囲碁部顧問】。50代のベテラン教師。

とても温厚な性格で、何事もテンポがゆっくりとしている。そのため実年齢よりも老けて見え、授業もスローペース。この時間を睡眠に充てる生徒も多いが、そうした者を声を荒げて叱ることもないため、違った意味で評判が良い。しかし、教員生活 25年目にして初めて、教えがいのある生徒にめぐり合い、最近は授業に活気が出るようになった。

この日の授業のテーマは幕末。マリは熱心にフンフンとうなずきながら林先生の話を聞いている。

その隣の席で、丁寧には黒板をノートに写すシズカ。

明智は形だけでも授業を聞いている様子で、その明智に「私に気づいて！」光線を出しながら見つめるサトミ。そのサトミをさらに「俺の思いよ、届け！」光線を出しながら見つめているのが石田。

そして上田はというと、やはりと言うべきか居眠りをしていた。

授業が終わりに近づいた頃、ふいに林先生が質問を投げた。

「歴史に『if』はないが……。もし、坂本竜馬が近江屋で切られていなかったら、竜馬そして日本はどうなっていたと思うかね？」

林先生の突然で奇妙な問いに、生徒たちは一応、思索する素振りを見せた。

「教科書に書いてあることを、ただ年号順に暗記するだけが歴史じゃないぞ。想像を膨らませ、彼のしたこと、しようとしていたことを考えなさい」

「ハイ！」

石田が元氣よく声を出して、真っ先に手を挙げた。

「……うむ、石田くん」

林先生に指名された石田が得意げな顔をして、すーと席から立ち上がった。

それから軽く咳払いして、「僕が思うに、竜馬は明治維新の一番の立役者なわけですから、大久保利通、西郷隆盛、木戸孝允と並んで明治政府の要職に就いたに違いありません」とキリッとした顔で答えた。

（よし、サトミちゃんにいいとこ見せてやったぞ！）

石田はそんな風に思っていたに違いない。サトミが感心した眼差しを、自分に向けているに違いないと期待して、石田は斜め前の席に座るサトミのほうをちらりと見た。

「竜馬って、『櫻守』とかっていう歌を、歌っていた人々？」

「さくらもり〜？ てか古！ サトミ、それ谷町シンジじゃん。『桜坂』だよ〜」

「あっ、そっか〜」

サトミは石田の発言などまるで聞いておらず、隣の席の女子と雑談していた。

林先生は先程の自信満々の顔から、急に落胆してしまった様な石田の顔を見やった。

「うん……そうかもしれないな。しかし、もっと明治維新後の広い世界に目を向けてみてはどうか？ 竜馬が生き生きとしている様を想像してみなさい」

そう言う和林先生は教室を見渡し始めた。

隣の席でマリがいつになくソワソワしているのに、シズカは気づいた。

これまでクラスでも目立たず、歴女であることも隠そうとしていたマリ。しかしこの林先生の突然の問いにはたまらず、席から立ち上がり、彼女が想像する明治維新後の坂本竜馬の壮大な可

能性を、居並ぶ面々に対して声を大にしてぶちまけたくて仕方がなかった。

そのどうしようもない葛藤でマリの体は震え、心臓がバクバクしていたのである。

「なんだ、他にだれも意見はないのか？」

林先生は少し残念そうだ。

マリの後ろの席で不貞腐れている石田も、マリの様子に気がついた。

「遠山、トイレか？ 今なら行っても大丈夫なんじゃないか？」

石田なりの優しさだったのもかもしれない。しかし、そのデリカシーのないささやきに、サトミがキツと睨みつけた。今さらながら、気まずいことを言ってしまったという表情を浮かべる石田。「17歳の恋が儚く散った瞬間だった。

シズカが周りには聞こえない小声で、マリにささやいた。

「マリちゃん。私、マリちゃんの意見が聞きたいな」

その言葉にマリの震えがピタリと止まった。そしてコクリと小さく頷くと、うつむいたまま右手を高々と上げた。

「遠山さんどうぞ」

林先生が待ってたよ、といわんばかりに、しかし優しい口調で遠山マリを指名した。

おずおずと立ち上がったマリを、教室中の生徒たちが注目する。

「もし坂本竜馬が倒れていなかったら……、明治維新後は武人や政治家としてではなく、幕末に築いた人脈や貿易、操船などの知識を生かして商人として大活躍したと思います……」

「ふむ、続けなさい」

最初はゆっくりとしていたマリの口調が林先生の合の手で、だんだん速まっていくな。しまいにはマリの口から堰を切ったように言葉があふれ出した。

「ひよっとしたらそれは日本を、いや世界を代表する東インド会社のような一大貿易商社になっていたのではないでしょうか？」

あまりのマリの熱の入り方に、ちよっと引き始める生徒たち。

「なぜそう思うのかな？」

「それは、同郷の友、岩崎弥太郎の存在です。そして竜馬が設立した海援隊の存在からも説明がつかます！」

林先生の問いに対して、知り得る知識を総動員したマリ。想像する竜馬のいる明治時代を熱く語った。次第に明智やサトミ、一度は引いたはずの他の生徒たちも、マリの話に熱心に耳を傾けていた。

「……以上です」

マリは話し終わると、憑きものが落ちたようにストンと席につき、申し訳なさそうにうつむいた。

「豊富な知識とそれに基づく豊かな想像力でしたね。すばらしいです」

林先生がしわくちやの笑顔でマリを誉めた。林先生は熱心な授業態度のマリがお気に入りだった。

「すごい！ マリ、カッコよかったよ！」

パチパチと拍手をしながらサトミがマリに声を掛けた。それにつられて何人かの生徒もマリに拍手を送った。

「ハハッ！」

寝言のようにつぶやいて目を覚ました上田。

みんなの拍手で、うつむいていたマリも顔を上げ、首筋を掻きながらシズカに向けて照れ笑いをした。

授業が終わると、解放を祝う生徒たちが各教室から廊下にあふれ出て来て、校舎内が一気に賑わい始めた。

「さっきの同感」

教室を移動する生徒たちの中に交じって、明智がマリの横を通り過ぎざまにコソリと告げた。

「へへ……」

明智の言葉にマリの表情も輝く。

「何だ、あの野郎？」

終始、居眠りしていた上田はそんな明智とマリの姿を見て、首をひねるばかり。そしてマリが教室から出ようとした時、サトミがマリのもとへと近寄って来た。

「知らなかったな。マリがこつんな、才能の持ち主だったなんてえ。私、感動しちゃった」

「才能、だなんて……」

身振り手振りを付け加えながらサトミは、はにかんだ様子のマリを誉めちぎった。

「ところでえ……、今朝話したことなんだけどお……」

いつまでも照れ笑いするマリに、サトミが言いにくそうに話題を切り替えた。

「計画通り昼休みに、私……するわ」

そう言うとサトミはマリにCDを手渡した。これを昼休みにかけるということだ。

手渡されたCDを見つめるマリ。

(敵に塩を送る……違う……サトミは友達だもん、応援しなきゃ)

彼女の脳裏をさまざまな思いが駆け巡る。

「じゃ、よろしくね♪」

反応の鈍いマリにはお構いなし、サトミはパチリとウインクすると、廊下を走って行ってしまった。

「う、うまく、いくといいね……」

愛想笑いを浮かべたマリは、そう答えるしかなかった。

そのふたりのやりとりをシズカが何気なく聞いていた。